

女子青年の友人関係の社会的ルールに関する研究 —重要性評価とその理由、及び、相手の親密さと行為遂行の関係—

畠 山 寛

Hiroshi HATAKEYAMA : The Rules of Women's Adolescent Friendships

本研究の目的は、女子青年を対象に友人関係における社会的ルール的重要性評価とその理由について明らかにすること、さらに、親密さが異なる友人関係の自他のルール遂行行為との関連を明らかにすることである。研究1では「困ったときに相談にのること」、「嘘をつかないこと」といったルールがあることが明らかにされ、これらは友人関係において最も意識されやすいルールだと考えられた。研究2では、先述のルールに対する重要性評価と理由が明らかにされたが、予測された関係の維持に関わる理由以外にも理由が挙げられ、単に社会的ルールの重要性は関係の維持を意図しているのではないことが示された。さらに、社会的ルールに従う行為は相手の親密さによって異なることも明らかにされた。

キーワード：女子青年 社会的ルール的重要性評価とその理由 親密さと行為の遂行

1. 問 題

青年期の友人関係はどちらかが一方的に支えるといった親子関係や教師と生徒の関係とは異なり、対等な人間関係である。また、強制的な関係ではなく自主的な関係である。そのため、子どもの頃に友達にはすぐに溶け込めなかったり、つきあい方に迷うこともあり、近年では友人関係の希薄化¹⁾や質的变化²⁾も指摘され、青年が友人関係を結ぶことが困難になっている。そして、これまでにこのような青年期の友人関係のあり方やそれに関わる諸要因との関連について検討されてきた。

中学生、高校生、大学生を対象にした研究では、同性の友人との関わり方には6つの関わり方、「防衛的」、「積極的相互理解」、「自己自信」、「全方向的つきあい方」、「被愛願望」、「同調」があり、学年段階が上昇するにつれ「防衛的」、「全方向的つきあい

方」、「同調」が減少し、「積極的相互理解」と「被愛願望」が増加することが示された。また、2次因子分析の結果から友人との関わり方に関する姿勢として「深い—浅い」という次元、そして、関わる範囲を示す「広い—狭い」という次元が抽出され、中学生では「浅く広く」、高校生では「深く広く」、大学生では「深く狭く」関わるといった特徴が明らかにされ、年齢段階が異なることで友人との関わり方が異なることが示された³⁾。また、性差に着目した研究では、友人とは、男子では一緒に遊ぶ相手ことを示すことや、女子では生活でもっとも気になる対象であることなどその意味合いが異なること⁴⁾、また、女子高校生は男子高校生と比較して濃厚であるために長続きしにくいことが明らかにされている⁵⁾。

これらの研究では友人に対してどのように関わろうと考えているのか、あるいは、友人とはどのような存在であるのかに注目してきた。しかし、友人関係に限らず対人関係には個人に外在し、暗黙の了解

としての社会的ルール（以下、ルールとする）が存在する。このルールとは感情的側面や友人に対する態度、例えば、友人に対して「浅くつきあいたい」、「色々な人と友達になりたい」といった内的な願望・気持ちではなく、「隠し事をすべきではない」、「困っているときには援助する」のように社会的な行為を規定するものであり、暗黙の約束事と言える。

このようなルールは実際の対人関係を規定するものであり、重要な要因であると考えられる⁶⁾ものの、本邦の友人関係の研究では必ずしも注目されてきたとはいえない。そこで、本研究ではルールの観点から友人関係について検討することとする。

対人関係とルールの関係についてはArgyle & Henderson⁶⁾やBigelow, Tesson, & Lewko⁷⁾において検討されてきた。Argyle & Henderson⁶⁾では青年、成人を対象にした友人関係のルールに関する研究を行い、友人関係において重要なルールや友人関係の崩壊に関わるルール違反について明らかにしている。また、過去の友人と現在の友人とではルールが異なることやルール違反は自分よりも相手がしていると考えられることも明らかにしている。Bigelow, Tesson, & Lewko⁷⁾では、小学校の高学年から中学生までを対象に様々な内容のルールを使用し、これに従う程度が両親、きょうだい、親友、友人、同年代の他人、教師とではどの程度異なるのかを明らかにした。これらの結果から、相手が異なることにより重要視されるルールが異なっていたり、ルールに従う程度が異なることが示された。

これまでのルール研究では、友人関係において重要視されるルールが明らかにされてきたものの、何故、そのルールが重要だと考えられるのかについては明らかにされていない。ルールは個人に対して外在するものであるが、それを個人が重要なものであると考えerかどうかは異なることである。

タブーに関する研究では、会話において開示されない内容が何故あるのかについてその理由を明らかにしており、相手との関係維持が阻害されることが

挙げられている⁸⁾。このことからルールは個人に対して外在するが、それを重要視する理由には相手との友人関係が維持されるかどうかに関係していると考えられる。つまり、関係維持にとってある行為が必要であれば、それはルールとして重要視されると考えられるが、ある行為が不必要、あるいは、望ましくないものだと考えられると重要視されないと考えられる。

そこで、本研究では同性の友人関係のルールについて明らかにするとともに、そのルールの重要性和その理由についても明らかにすること目的とする。これに関する仮説として、ルールの重要性評価には対人関係の維持に関わる理由が存在するだろう。

次に、Argyle & Henderson⁶⁾やBigelow, Tesson & Lewko⁷⁾では親密さによってルールの重要性が異なることを明らかにしている。またBigelow, Tesson & Lewko⁷⁾ではその行為を遂行する程度も検討されているものの、これまでに、青年期の友人関係において、親密さが異なる相手に対して行為を遂行する程度がどの程度であるのか、また、自分と相手とではどちらかが遂行する程度が高いのかについて検討されてはいない。そこで青年期を対象に親密さの程度とルールの遂行する行為の程度との関係について探索的に検討する。

本研究では以上の点について検討するが、友人関係に関するルール項目の収集に関しては研究1で行い、その研究で得られたルール項目の中で、より多くの人から得られたルールについて研究2の理由分析、及び、親密さによる行為遂行の違いについて取り上げることとする。

また、本研究では先述したように、女子青年が生活の中でももっとも重要なこととして友人関係を挙げていることから⁹⁾、本研究では、女子青年を対象とする。

2. 研 究 1

2.1 方 法

- (1) 被調査者 女子短期大学生87名
- (2) 手続き 「同性の友人関係のつき合い方に関するアンケート」を集合調査形式で行った。調査内容は次の2点である。①同性の友人関係において「すべきこと、しなければいけないこと」などについて、②「すべきではないこと、してはいけないこと」などについてである。これらの質問に対して、自由記述で回答を求めた。

2.2 結 果

自由記述で得られた項目は調査者によって分類された。①「すべきこと、しなければいけない」ことの回答として得られた項目は10の内容に分類された。そして、「すべきではないこと」などの回答として得られた項目も10の内容に分類された。これらの結果をTable 1に示す。

2.3 考 察

被調査者から得られたルール項目は、先行研究 Argyle & Henderson⁶⁾や Bigelow, Tesson, & Lewko⁷⁾のルール項目と比較すると、内容に豊富さがみられない。この点について、Argyle & Henderson⁶⁾は「ルールはあまり意識されることが無く、

ルール違反がある場合に意識されやすい」ことを指摘しているが、本研究ではこのような状況を仮定しておらず、そのため最も意識されやすい内容が自由記述に反映され内容に豊富さが見られなかったと考えられる。

内容を見ると、「すべきであること」では相談することや悪いところを指摘するなど、友人としてサポートすることを必要だといった従来の友人関係にも認められる内容があるが⁹⁾、楽しませる・盛り上げるなどの項目もあり現代の若者の友人関係の特徴が反映されていると考えられる項目もみられた。また、「すべきではないこと」では嘘をつくこと、相手を傷つけること、悪口をいうことなど、相手との関係に悪影響を与えると考えられる行為が述べられていると考えることができる。

研究2では、この結果を踏まえ「すべきこと」「すべきではないこと」でもっとも多くの人が回答した「相談にのること」と「嘘をつかないこと」といったルールについて、それぞれのルールの重要性評価とその理由、そして、親密さの程度による評価の違いについて明らかにする。

3. 研 究 2

3.1 方 法

- (1) 被調査者 女子短期大学生62名を対象とした。
そのうち、「相談事」に関わるルールに関しては62

Table 1 女子青年の友人関係のルール項目

すべきであること	n	すべきではないこと	n
困っているときには相談にのること	30	嘘をつくこと	33
話をきちんと聞くこと	13	相手を傷つけること	23
挨拶をすること	8	悪口を言うこと	14
相手の悪い点を指摘すること	8	無視をすること	11
笑顔でいること	6	相手が嫌がることをすること	11
楽しませる・盛り上げること	6	相手が気にしていることに触れること	8
優しくすること	6	約束を破ること	8
思いやりを持つこと	5	裏切ること	7
ありのままの自分であること	4	相手の気分を悪くさせること	4
本当のことを言うこと	4	自分勝手に振舞うこと	4

名が対象となり、「嘘をつかない」に関するルールでは54名であった。

- (2) 調査用紙 「同性の友人関係についてのアンケート調査」というタイトルで調査を行い次の内容についてたずねた。①それぞれのルールに対する重要性評価、②重要性評価の理由、③親友に対して自分がその行為を遂行する程度、④親友がその行為を遂行する程度、⑤友人に対して自分がその行為を遂行する程度、⑥友人がその行為を遂行する程度である。このうち②の質問が自由記述であり、それ以外の質問項目では高い極を5点とし3を中点とする5件法で尋ねた。なお、「嘘をつかない」というルールに関しては、質問④～⑥までをルールに従わない程度にした。
- (3) 友人の親密さの操作 親友を「日常的に会う友人の中で特に親しくしている友人」とし、友人は「日常的に会う友人の中でそれほど親しくない友人」とした。

3.2 結果

本研究では「困っているときに相談する」というサポートに関する内容と「嘘をつくこと」という信頼に関する内容について行った。この順で結果を記載する。

「困っているときには相談する」というルールに関して、重要性評価は5件法で平均4.24と高かった。重要性評価に対する自由記述による理由を

Table 2に示す。この分類は調査者が行った。

次に、友人の親密さの違いと行為の遂行の程度についてその平均点と標準偏差をTable 3に示す。この得点に違いがみられるかを検討するために分散分析を行った結果、親友が相手の場合、自分よりも相手の行動が多く ($F(1, 61) = 6.61, p < .01$)、友人においても同様の結果であり ($F(1, 61) = 36.1, p < .01$)、また、相談する場合には、友人に対してよりも親友の方が多く ($F(1, 61) = 194.88, p < .01$)、相談にのる場合にも、友人より親友の方が多かった ($F(1, 61) = 91.72, p < .01$)。

「嘘をつかない」に関しては、5件法で平均3.72とやや高い重要性を示した。「嘘をつかないこと」に関する重要性評価とその理由をTable 4に示す。分類は調査者が行った。

次に、友人の親密さの違いと行為の遂行の程度についてその平均点と標準偏差をTable 5に示す。なお、この得点は嘘をつくことについての遂行程度を示している。この得点に違いがみられるかを検討するために分散分析を行った結果、親友よりも友人に対して嘘をつくこと ($F(1, 53) = 16.13, p < .01$)、そして、親友よりも友人から嘘をつかれると考えて

Table 3 「相談事」と友人の親密さ

	相談する	相談にのる
親 友	3.73 (.91)	4.05 (.89)
友 人	2.31 (.64)	3.02 (1.05)

Table 2 「相談にのる」ことの重要性評価と理由

評価段階	理 由	n	評価段階	理 由	n
5	気が楽になるから	9	3	一人よりも解決しやすいから	2
	自分もしてもらいたいから	8		気が楽になるから	1
	助けてあげたいから	5		仲が深まるから	1
	当然のことだから	5		自分で解決することも大事	1
	一人よりも解決しやすいから	4		相手が困っているから	1
4	当然のことだから	5	2	自分が責任感を感じるのが嫌だから	2
	一人よりも解決しやすいから	3		相談にのることだけが友人の役割ではないから	1
	助けてあげたいから	3		自分もそうのようにしてもらいたいから	1
	友人だから	2		友人だから	1
	信頼の証だから	2			

いる ($F(1.53)=8.00, p<.01$) ことが明らかにされた。その他には有意差はみられなかった。

3.3 考 察

研究2では「困っているときには相談にのる」、「嘘をつかない」の特定のルールに注目して検討を行った。

まずはじめに、「困っているときには相談にのる」ことについて述べると、このルールの重要性評価が4.24であり、女子青年の同性友人関係において重要なルールの一つである事が明らかになった。また、重要性評価の理由をみると3以上の評価に共通する理由として、「一人よりも解決しやすい」という問題解決の手段として有効である認識が共通している。また、「当然のこと」や「助けてあげたい」という理由も評価の5, 4に共通してみられている。このことは相談することが当たり前であったり、相手を思う気持ちが表面に現れる行為としてとらえることができる。逆に、重要性評価の低い2などの理由では、友人を思う気持ちや問題解決へのしやすさよりも自分に対する責任の強さに注意が向いており、自己中心的であると考えられる。ルールに対する重要性評価の理由には他者志向的、あるいは、自己志向的な理由など異なる理由がある事が明らかに

された。このような理由の中で友人関係の維持に関わる理由として、評価4で挙げられている「友人だから」、「信頼の証だから」、評価3における「仲が深まるから」などがみられ、この点において仮説は支持されたと言える。

次に、「困っているときには相談にのる」といった程度についてみると、親友に対しては相談にのる方が相談するよりも多く、また、友人に対しても同様である事から、相談事に関しては自ら積極的に相談するというよりも、相手の相談にのることが多いことが考えられる。また、友人よりも親友に対して相談したり相談にのることが多いことから、親しい相手ほど話しやすく、自己を表現しやすいと考えることができる。

「嘘をつくこと」に関しては、このルールは女子青年の同性の友人関係において中程度の重要性のあるルールである事が明らかになった。この中程度の重要性に関しては、「嘘が必要なときもあるから」などのように必ずしも嘘をつくことがいけないこと

Table 5 「嘘」と友人の親密さ

	嘘をつく	嘘をつかれる
親 友	1.87 (.72)	1.88 (.86)
友 人	2.26 (.62)	2.24 (.67)

Table 4 「嘘をつかない」ことの重要性評価と理由

評価段階	理 由	n	評価段階	理 由	n
5	信頼に関わるから	4	4の続き	友人関係とは言えなくなるから	2
	友人関係が壊れるから	4		友人を困らせることになるから	2
	何度もそが必要になるから	2		責任感を感じるのはイヤだから	2
	嫌な気持ちになるから	2		嘘はばれるから	1
	友人をだますことになるから	1		嘘は良くないことだから	1
	当然のことだから	1		何度も嘘が必要になるから	1
	嘘は良くないことだから	1		自分もしてもらいたいから	1
	嘘を言いたくないから	1		友人だから	1
	相手の為の嘘なら良い	1	3	嘘が必要なときもあるから	10
4	信頼に関わるから	7		ある程度の嘘は必要になるから	2
	嘘は良くないことだから	6	2	嘘が必要なときもあるから	5
	いやな気持ちになるから	5		本当のことばかり言うことも良くない	1
	嘘が必要なときもあるから	4	1	どうでも良いことだから	1
	嘘をつかれたくないから	2			

ではない状況があること指摘する理由もあることから、「嘘をつかないこと」は状況規定的なルールであると考えることができる。

「嘘をつかない」ことに対する評価理由では、「信頼が壊れるから」、「友人関係が壊れるから」、「友人関係とはいえなくなるから」など、直接的に関係の維持に関わる理由がみられた。このルールにおいても仮説は支持されたといえる。しかし、相手の気持ちを考慮する理由や嘘をつくことがもつ肯定的な効果の面に言及する理由もあり、関係維持には関連しない理由もあることも明らかにされた。次に、「嘘をつくこと」の程度についてみてみると、親友よりも友人に対して、嘘をつき、嘘をつかれると考えていることが示された。このことから、嘘が必要となる関係は親しい相手よりも、あまり親密でない相手に対してであると言える。なぜ、あまり親しくない相手に対して嘘をついたり、相手から嘘をつかれると考えるのだろうか。これは理由から推測すると、友人と関係はあまり親密でないために、信頼関係が壊れ、友人関係が悪くなってもかまわないと考えることもできる一方で、あまり親密ではない相手に対して必要な嘘をつくことで関係が維持されることがもできる。しかし、嘘が友人よりも親友に対してしないことを考えれば、基本的に嘘はいけないことであり、嘘がばれることで信頼関係が壊れ、友人関係が解消されと考えているといえる。

4. 総 合 考 察

本研究では、女子青年の友人関係に関する社会的ルールを明らかにし、その重要性評価とその理由、及び、親密さが異なる友人と自他の行為の遂行の程度との関連を検討した。

研究1においては、「困っているときには相談にのる」、「嘘をつかない」などが多くの被調査者によって得られたルールであった。また、すべきではないことに対して多くの被調査者が回答していることから、禁止されることがらについての意識化がな

されていることも考えられる。

研究2では、重要性評価とその理由が明らかにされ、仮説が支持されたことによりルールの重要性は関係の維持と関わることが明らかにされた。しかし、ルールの重要性評価には関係維持に関する以外の他の理由があることも明らかになった。例えば、相談事に関しては「解決しやすくなる」など課題解決の効率化といったことなどである。そのため、今後は重要性評価に関係する要因を整理・検討して必要があると考えられる。

また、親密さが異なる相手との、行為遂行の程度についても検討した。この結果から、相手が異なることによって、自分と相手の行為遂行の程度が異なったりすることから、たとえルールであっても自分と相手が同じように行為を遂行しているとは考えていないことが示されたといえる。

本研究の結果は女子青年の結果のみであり、男子青年が同じ結果になるとは必ずしもいえないため、今後は、男子青年も加えた検討が必要になるだろう。

引用文献

- 1) 松井豊「友人関係の機能」斎藤耕二・菊地章夫『社会化の心理学ハンドブック』, 川島書店, 1990, 283-296.
- 2) 千石保『「まじめ」の崩壊：平成日本の若者たち』, 東京：サイマル出版会, 1991.
- 3) 落合良行・佐藤有耕「青年期における友達とのつき合い方の発達の变化」, 『教育心理学研究』44, (1996), 55-65.
- 4) 菅原真理子「現代ヤングレディ考—その実像と国際比較—」, 中央法規出版. 1979.
- 5) 天野隆夫「女子生徒のインフォーマル・グループ」, 『アジア文化』10, (1985), 87-95.
- 6) Argyle, M., & Henderson, M. 1984 "The rules of friendship", Journal of Social and Personal Relationships, 1 (1984), 211-237.
- 7) Bigelow, B.J., Tesson, G., & Lewko, J.H. "The

- social rules that children use: close friends, other friends, and “other kids” compared to parents, teachers, and siblings”, *International Journal of Behavioral Development*, 15 (1992), 313-335.
- 8) Boxter, L. A. & Wilmot, W. W. “Taboo topics in close relationships”, *Journal of Social and personal relationships*, 2 (1985). 253-269.
- 9) 岡田務 1993 「現代青年の友人関係に関する考察」, 『青年心理学研究』 5, (1993) 43-55.